知る、つながる、好きになる　ながおか市民活動情報誌

らこって

創刊100号記念
ありがとう。

もっと、知る、
つながる、好きになる。

2012年4月、「あなたの想いをカタチにする みんなが輝く情報誌」として誕生した「らこって」。キャッチコピーには、頼りになるリーダーも、場を盛り上げるムードメーカーも、活動を陰で支える縁の下の力持ちも、みんながまちづくりの主人公であり、その一人ひとりの想いを誌面を通して伝えていきたいという気持ちが込められています。2015年に「知る、つながる、好きになる　ながおか市民活動情報誌」とキャッチコピーは変わりましたが、その想いは今もここにあります。私たちがこのA4・6ページに詰め込んだのは、たくさんの「ありがとう」と「これからもよろしくね」という気持ち。これまでのみなさんの活動が今の長岡市をつくり、これからの活動が長岡市の未来をつくっていくから。今までも、今も、そして、これからも「らこって」は、何もない真っ暗なところに突然スポットライトを当てるのではなく、元々みなさんが持っているやさしい輝きを増幅させ、色々な人とつながり、やがて大きな光になる・・・そんなことができる情報誌でありたいと思っています。みなさんがお互いを知り、つながって、「好き」というあたたかい気持ちが、この長岡市にあふれていくように。

Racotte vol.100

発行●ながおか市民協働センター

ながおかの市民活動団体に贈る！

あなたの活動に＋（プラス）したい 6つの視点

2012年の市民協働条例制定から10年が経とうとしています。これまでに、長岡市にたくさんの市民活動が生まれ、広がってきました。ここでは、ながおか市民協働センターと関わりのある団体や活動の事例から学ぶ、活動に取り入れたい6つの視点をお届けします！

① できること、できる範囲を大切に

市民活動で大切なのは、「できることを・できる範囲で」行うこと。無理せず、楽しく取り組むことが、活動を長続きさせる秘訣です。ここでは、自分たちにできることを大切に、長岡市の3つの地域で約6年半に渡って続いている活動を紹介します。

PICKING UP MIND（ピッキング アップ マインド）

PICKNG UP MIND（ピッキング アップ マインド）は「ゴミを拾い、心を拾う」を合言葉に、早朝にゴミ拾いをしている活動です。最初は、月に一度旧市内で活動していましたが、SNSなどで若者の共感を呼び、与板・栃尾地域でも開催されるようになり、現在まで約6年半続いています。この活動がこれまで続いてきた要因は、ゴミ拾いという誰もが身近にできる内容で、月1回自由参加制にしたこと。地域のために自分たちが「できることを・できる範囲で」行うという、市民活動の基本を体現しているような活動と言えます。

② 「好き」を活かして社会貢献

市民活動の動機の一つに、自分の趣味や好きなことを活かしたいというものがあります。自分が楽しめることで相手に喜んでもらい、それが社会のためになる、まさに「三方よし」の市民活動。ここでは、音楽を通じて長岡市のまちづくりに貢献している団体をご紹介します。

オンザロックオーケストラ

1978年、甲子園出場を決めた母校・中越高校を応援しようと同級生で結成されたフルバンドのオーケストラです。自分たちが定年を迎える頃には、福祉施設に慰問活動に行けるようなバンドになりたいという夢を叶え、現在は施設を訪問し、映画音楽やダンス音楽、歌謡曲などを演奏しています。また、2019年からは、地域交流活性化のため、カラオケ愛好家を募集し、生バンドの伴奏で歌ってもらう長岡市地域交流歌謡ショーを各支所地域で開催。自分たちの「好き」を活かして、地域に笑顔や交流を生む長岡市が誇るビッグバンドです。

③ 制度の「スキマ」を埋める

行政サービスや市場サービスだけが社会問題の解決を担うには限界があり、その限界によってできる支援が行き渡らない「スキマ」を埋めることが、市民活動に期待されている役割の一つ。ここでは、その役割を十二分に果たしている社会の担い手たちをご紹介します。

摂食障害親の会 向日葵の会

1996年の設立から25年間に渡り、摂食障害当事者回復のために親自身の心が助かっていくことを大切に、月2回の相談会や講師を招いた公開講座を開催。摂食障害の子どもをもつ親が安心して子どもたちと向き合えるように、心の内を語り合い、感じ、考え、気づきを得る場をつくっています。現在、摂食障害専門の治療機関や相談窓口は少なく、地方ではなかなか支援の手が届かないと言われている中で、当事者目線の支援を続ける「向日葵の会」の活動は、長岡市の摂食障害支援に大きく貢献しています。

特定非営利活動法人

学びスペースあうるの森

不登校の子どもたちが学校以外でも学力や社会性を身に付けられる選択肢を増やそうと、2013年に設立。小中高生を対象に、放課後の学びや不登校児童生徒への学習支援と居場所の提供を行っています。子どもたちに成功体験の機会を提供するため、レシピ考案から販売までを自分たちで行うカレー屋台出店や、不登校の子どもたちが自らの体験を書いた本の出版などに取り組んできました。こうした子どもたちの自主性を重んじる活動は、不登校の子どもたちの居場所をつくるだけではなく、子どもたちがそれぞれに合った教育を選ぶ社会の気運を高めています。

④ 地域の「困った」を楽しく解決！

私たちのまちは、気候変動による自然災害や地域住民の高齢化など、今までなかった新たな社会問題に直面しています。こうした問題に、市民活動ならではのスピードと柔軟なアイデアを活かして取り組んでいる事例をご紹介します。

越後雪かき道場

（主催：特定非営利活動法人中越防災フロンティア）

全国で152人の命を奪った2006年の豪雪。その多くは、除雪中の事故で亡くなった高齢者で、地域の高齢化が影響していると言われています。この課題にいち早く取り組むべく、特定非営利活動法人中越防災フロンティアが2007年に始めた事業が「越後雪かき道場」。ボランティアに雪かきを頼めるように、除雪の際の安全確保について学べる講座を開催。雪かきの知識や技術の習熟度によって初級～上級の認定証を発行するというユニークな方法で、豪雪地域における高齢化という課題に向き合っています。

⑤ 協働で取り組む

「協働」とは、市民活動団体や行政機関、企業などの複数の主体が、それぞれの強みを活かし互いの弱点を補い合いながら、同じ目標に向かって活動すること。ここでは、複数の地域と地元企業、地域住民が協働したからこそ生まれたイベントをご紹介します。

長岡縄文の丘・米百俵マラソン

（主催：長岡縄文の丘・米百俵マラソン実行委員会）

5,000年前に縄文人が走ったであろう丘を、歴史とロマンを感じながら走るというコンセプトのもと、2017年から毎年開催されているマラソン大会。その始まりは、「宮本の夢を語る会」で語られた、ある男性の「宮本地区でマラソン大会をしたい」という夢でした。その夢を叶えるべく、宮本・大積・青葉台・関原地区と地元企業、商工会、学校が実行委員会を結成。マラソンだけではなく、特産品である古代餅を使った鍋のふるまいや地元のよさこいチームによる演舞での応援など、地域の魅力がつまった長岡市の目玉行事の一つが誕生しました。

⑥ 「関わりしろ」をつくる

市民活動では、団体運営の中心メンバーの他に、活動のお手伝いをしてくれる人たちの存在が必要で、いかにその人たちが関わる余白をつくるかが活動継続の鍵と言えます。ここでは、「関わりしろ」づくりが上手な団体をご紹介します。

キャンドルナイト@与板実行委員会

キャンドルを使って装飾した会場で、歌やダンスのパフォーマンス、地元与板の飲食店を中心とした出店ブースを楽しめるイベント「キャンドルナイト@与板」を開催。「与板を盛り上げたい」という想いから2013年に始まり、今では「与板の顔」として定着しつつあるイベントです。このイベントでは、約20名のボランティアが準備段階から関わり、会場に飾るキャンドルの作成や当日の会場の飾りつけを行っています。定期的に顔を合わせて準備をすることによって生まれるつながりや達成感が、「このイベントにまた関わりたい」と思ってもらえる秘訣なのかもしれません。

ぷれジョブながおか

小学5年生から高校3年生までの障がいのある子どもたちに、企業や公共施設でのお仕事体験を提供しています。ボランティアの「ぷれジョブサポーター」が仕事を見守り、時には手伝ったり助言したりしながら子どもたちをサポート。ボランティアには、無理なく不安なく関わってもらうことを大切に、事前に子どもと親との顔合わせを行い、1ヶ月に1回1時間程度活動してもらっています。こうした工夫を大切に、ボランティアが「子どもの社会参加を応援したい」という想いを叶え、安心して活動できる場所をつくっています。

現在、協働センターには、ここで紹介させていただいた団体も含め426の団体（2021年3月1日現在）が登録されています。この426の団体と、これから生まれる団体がつくる長岡市の未来が「笑顔いきいき」であるように。これからも、協働センターは、みなさんと一緒に「協働のまち長岡」の実現を目指して歩んでいきます。

相談件数	登録団体数	らこってに取り上げた団体の数	インタビューを掲載した人の数
6,656件	426団体	390団体	91人

※データは全て、2021年3月1日現在のものです。

らこって100号記念特別対談

市民参加、市民協働、そしてその先へ。

長岡市が「協働によるまちづくり」を推進するにあたって市民協働条例を定めてから10年。これまでの長岡市における市民活動の歩みと、地域の未来、市民活動が果たすべき役割について、磯田市長と、協働センターの運営を受託するNPO法人の羽賀代表理事にお話を伺いました。

条例制定から10年、確かな手応え。

磯田市長（以下、市長）：市民協働条例は、市民の皆さんと話し合いを重ねて、つくりあげた条例です。1988年に地域福祉活動として始まった「ともしび運動」では、行政の事業に市民にも加わってもらう「市民参加」がスローガンでした。それが「市民協働」では、行政と市民が対等の立場でやろうとなった。ステージが一つ上がったと感じました。

羽賀代表（以下、羽賀）：協働条例は市民ワークショップを14回も開きました。そうした参加型の文化が、市民の主体性を育んでいると思います。現在、協働センターに登録している団体は400団体を超えるなど、活動の見える化が進みました。

市長：10年を迎え、条例が掲げた理想に近づいている手応えはあります。ただ、新型コロナウイルス感染症が社会に大きな影響を及ぼす中、市民活動にも変化が求められています。今まで培ってきたものを活かして、次のステージを目指すタイミングだと考えています。

羽賀：市長は以前から「地域共生」というキーワードを出されていますね。

市長：「自助、共助、公助」という言葉が話題になりました。私は、「共助」に対して公的な支援をして、市民同士の助け合いの仕組みを拡げていくことで「地域共生」を実現していきたいと思っています。そのベースとなる担い手が育ってきてくれたと思います。

外から人を受け入れ、化学変化を。

市長：共助をさらに豊かにするためには、これからはコミュニティを『外に開くこと』がポイントになると思っています。

羽賀：長岡市は、2004年の中越震災の際に、自分たちだけではどうしようもない事態に遭遇し、外部の人たちに助けてもらいました。その経験から地域には「若い人たちが来ると地域が変わる」という期待感もあり、外部の人に対して寛容だと思います。

市長：ウイルス禍により、企業の拠点や人の居住を大都市から地方に移すという「地方分散」の流れの中で、若い人、外の人に「選ばれるまち」になれるかどうかが、ますます問われてきます。

羽賀：単に外から人が来るだけでは何も変わりません。私たちは「受援力」と言いますが、受け入れる側が外部人材を上手に活かす体制づくりも大切です。

市長：協働センターのスタッフは、北海道や長野県、また市外の出身者が大半だと聞いています。受け入れる側が「ソトモノ目線」を内部に持っていることが、「協働」や「地域共生」には不可欠ですね。

長岡市長

磯田 達伸

1976年から長岡市役所に勤務し、副市長職を経て2016年市長に初当選。現在2期目を務めている。

×

NPO法人市民協働ネットワーク長岡
代表理事

羽賀 友信

長岡市国際交流センター長も務め、グローバルな人材育成や協働によるまちづくりに尽力している。

「人」を大切にしてきた長岡の風土。

羽賀：災害ボランティアだけでなく、大学生活や留学、ビジネスでも、長岡に関わったことで「長岡に育ててもらった」と思っている人が多くいます。外の人を受け入れ、人を育てていく姿勢というのは長岡が昔から育んできた風土ではないかと思います。

市長：長岡市初の公立図書館「互尊文庫」を設立した野本互尊翁は「一にも人、二にも人、三にも人」という言葉を残しました。本や知識ではなく、図書館に集まった人たちが、切磋琢磨して学び合い、一緒に何かにチャレンジしてほしい。何よりも人を育てることが大切と説いたのだと思います。

羽賀：NaDeCBASE（ナデックベース）もコーディネーターが来てから活性化した印象です。協働センターもコーディネーターを配置する予算をしっかり頂いている。震災の際も復興支援員という「人的支援」をしてきました。長岡市が制度を用意するだけでなく、市民や団体と一緒に解決策を考えたり、つないだりする「人」に予算を付けてきたというのは大変重要だと思います。

市長：ハブとなる「人」がいて初めてプラットフォームは機能します。そうした人を支え、育てるプラットフォームが複数あることが長岡の特徴。今後は、そのようなプラットフォーム同士が有機的につながり、一つの生態系（エコシステム）になってほしい。その生態系に入ることで、どんな分野からでも、人とのつながりや、チャレンジ、学びの機会が得られるようになれば、長岡市の大きな魅力になると思います。

幸せな暮らしが叶う地域社会へ。

市長：社会保障が完璧で、隣人に頼らずに、行政が何でもやってくれる社会になっても、人間は幸せになれるとは思えません。それよりも「助けて」と声をあげた時に、周りが助けてくれるという関係性の中にこそ生活が成り立つのだと思います。市民活動というのはまさに助け合う関係性をつくるもの。地域共生の源もそこにあります。

羽賀：助け合いを行う人を支え、育てる場所として協働センターを運営してきました。ただ、ウイルス禍の中でどのような市民活動が可能なのか、なかなか方向性が見いだせていません。

市長：感染症の時代はこの先も続きます。この一年で、人と人とのつながりが希薄になったことに強い危機感を持っています。「直接会わなくても大丈夫」「このままで良いじゃないか」といった声まで聞こえてきています。しかし、それでは地域社会は崩れていってしまいます。このような状況だからこそ、協働センターや活動団体にはあえて人と人とのつながりをつくる、顔を合わせる場をつくる役割を期待しています。

羽賀：今、活動団体は「どの程度の活動なら許されるのか？」という不安を抱えています。

市長：今こそ「自分たちの活動が必要なのだ」と自信を持ち、知恵を絞って、工夫しながら活動してほしいと思っています。協働センターには、その後押しを期待しています。

長岡市 協働のあゆみ

長岡市は世界的に見ても珍しい豪雪地帯。また、2度の戦火や、多くの災害に遭ってきました。市章の不死鳥には、こうした困難を、何度も乗り越え復興を成し遂げてきた歴史への想いが込められています。幾度もの復興からは、さまざまな人々が手を取り合い、立場を超えて話し合い、地域のために行動してきた「協働」の精神が垣間見えます。これからも、私たち一人ひとりができることを考えながら、みんなで手を取り合って、長岡市の明るい未来を共に作っていきましょう!

年代 / できごと

後期旧石器時代（1万6千年前）
荒屋遺跡

縄文中期（5,000年前）
火焔土器で有名な馬高遺跡

江戸時代
長岡藩の城下町として栄える

1800

1868年：北越戦争（戊辰戦争）
降伏した長岡藩は再興を認められたものの財政的に窮乏を極めた。壊滅的な被害を受けた上、財政的困窮、食糧不足まで起こる中、多くの人が復興に尽力。

1870年:三根山藩からの救援米「米百俵」を売却した資金などを基に、学校を整備。

1879年：長岡城跡が城跡公園に

1900

1945年:長岡空襲
市街地の8割が焼け野原に

1958年：長岡市厚生会館竣工

1961年:三六豪雪
長岡地震

1963年:三八豪雪

2000

2001年:大手通に
ながおか市民センターがオープン

2004年:新潟・福島豪雨（7.13水害）
新潟県中越地震

2005~2010年:11の市町村が合併し、
新長岡市誕生

2006年:「ながおか市民活動フェスタ」の前身である「市民活動まつり」初開催
中越市民防災安全大学が開校

2007年:新潟県中越沖地震

2011年:まちなかキャンパスがオープン

市民による社会貢献

1918年
「互尊文庫」開館

野本互尊翁氏が「互尊思想を広げるには図書館の建設運営が一番だ。商人が自ら学ぼうとしなければならない」と考え、図書館建設と運営のための資金を長岡市に寄付。

1919年
「悠久山公園」完成

令終会（経済界で活躍し、還暦を過ぎた有志による会）が購入した土地5万余坪と、寄付地を併せた約8万坪により開園。

1965年
長岡市が「消雪パイプ」の特許を取得

浪花屋製菓の創業者・今井氏が持つ「消雪パイプ」の特許を「融雪の研究費に充ててほしい」と、長岡市に無償譲渡した。

1996年
「平和の森公園」開園

市民有志「平和の森をつくる会」が声を上げ、空襲の記憶をとどめ、平和のメッセージを発信するため、開園。

1996年
「雪国植物園」開園

令終会の活動に影響を受けた人々により「雪国植物園」が開園。造成維持運営組織の名称は「平成令終会」と命名された。

2012年
アオーレ長岡・ながおか市民協働センターがオープン
市民協働条例を施行

市民がつくった祭り

1986年
第1回 長岡100だるま大会 厚生会館脇広場にて開催

長岡の事業者が中心となり、雪を楽しむ祭りをつくり、後に「長岡雪しか祭り」へ進化。

2002年
第1回 米百俵まつり

秋にも長岡の目玉となるお祭りをつくろうと、市民、事業者、行政が協働し、新しいお祭りをつくりあげた。

2005年
復興祈願花火「フェニックス」打ち上げ

市民有志が中心となり資金を集め、復興を願った新しい花火を開発。

ちゅって 2021.4.1 〈vol.100〉 FREE 【発行】ながおか市民協働センター

配布場所 長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。

〒940-0062 長岡市大手通1丁目4番地10 シティホールプラザ アオーレ長岡 西棟3F
Tel.0258-39-2020 Fax.0258-39-2900 Mail. kyodo-c@ao-re.jp https://nkyod.org

要チェック!タイムリーな情報と協働センターの日常

「@NkyodoCenter」 「@nagaoka_kyodo」 「@mytown0258」